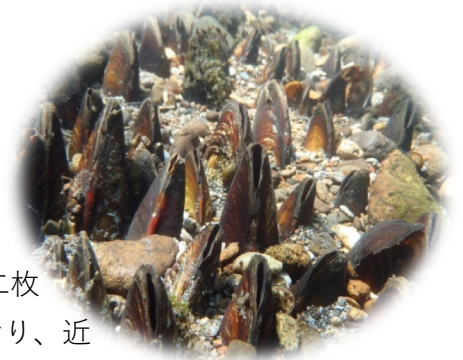


希少淡水二枚貝カワシンジュガイ類の絶滅の遅れ

～死にゆく個体群の現状把握～



カワシンジュガイ属は冷涼な河川に生息し、殻長 15 cm 程になる大型の二枚貝です。国内にはカワシンジュガイとコガタカワシンジュガイが生息しており、近年、全国的にその数を減少させています。本属は川底にたくさん群生するため、北海道東部の別寒辺牛川流域では、その数の多さから健全な生息地が未だ残っていると思われがちです。しかし、実際は個体数が多くても、残念ながら長い時間をかけて絶滅に向かってしまっている川もあるようです。本研究では、見た目の状態ではなく、貝の子供が実際にいるかどうかという点から、絶滅の潜在性を評価しました。

三浦一輝（北海道大学大学院 環境科学院 博士課程）

研究内容

北海道東部別寒辺牛川流域において、カワシンジュガイ属の稚貝（＝子供、長さ<20 mm）が見られるかどうか、本流を含む 9 河川（全 18 箇所）で調査を行いました。調査は、各河川で篩いを使い、長さ 2 mm 以上のカワシンジュガイ属を採集して、サイズ構成を調べました。結果、多数のカワシンジュガイとコガタカワシンジュガイ 2 種が 9 河川全てで確認されましたが、稚貝が見つかったのは、コガタカワシンジュガイの 3 河川のみでした。これは、なんらかの理由により、新しい稚貝が生まれていないことを示しています。特に、カワシンジュガイは長さが 50 mm 以下の個体さえ見つからず、若い貝がほとんどいないことが分かりました。

カワシンジュガイ属は寿命が 50 歳から 100 歳を超えます。特に、別寒辺牛川流域の寿命は長く、最長で 150 歳という記録があるほどです。このため、稚貝が生まれなくなっても、大人の貝が死ぬまでのしばらくの間は、見かけ上たくさんカワシンジュガイが川底にいるという状況が生まれます。しかし、実際は子供が生まれていないため、このままの状態が続けば、近い将来に絶滅してしまうと予想されます。

このように、長寿命生物の絶滅までの時間的な遅れが発生してしまうと、見た目の状態と実際の絶滅の潜在性が一致なくなってしまうため、生物保全の際に不健全な生息地を“健全”と誤って判断してしまう可能性が高くなります（例：下図の①と②。見た目は同じようだが、②は稚貝がいない個体群）。今後、カワシンジュガイの絶滅までの時間的な遅れ、つまり稚貝が生まれない理由を明らかにしていく必要があります。

